視　察　報　告　書

報告者氏名　小田桐　たかし
いぬい　紳一郎
植　田　和　子
高　橋　あきら

１　会派視察（市内）

２　期　　日
令和４年１１月９日（水）

３　視察地及び調査事項
（１）流山小学校
（２）南流山中学校
（３）南流山中学校移転用地（旧東洋学園大学キャンパス）

４　所感等

■流山小学校（Ｒ４年５月１日時点の児童数１０７８人、３７学級（うち特別支援学級５学級）、校舎築年数５０～５８年）について、トイレなど部分的改修は実施されているものの、最も古い校舎では築５８年が経過し、施設の老朽化への対応のみならず、給水・排水の配管や体育館放送設備等も経年的な劣化に対する計画的対応の必要性を理解できた。

また、教室内のロッカーの大きさは、教科書と教科書に合わせたランドセルのサイズupもあり、ハード面での改修と一体で、改善する必要性を知ることができた。

今後、学校敷地面積上の制約を加味しつつ、校舎の建て替え及び老朽化への改修を進めることが迫られている。同時に、①児童数の増減を加味した対応、②全学年３５人学級以下を想定した対応、③ＩＣＴや電子黒板等新規導入をにらんだ対応とともに、特に④学校の適正規模及び、⑤学区内での児童急増要件への対応は早急なルール化が迫られると考える。

市内で最初にできた情緒の特別支援教室を見学することができた。

Ｈ２７年暮れに流山小学校情緒支援学級親の会の方から、近隣市にくらべて少ない情緒学級を増やしてほしいとの訴えが届いた。会派では、翌年度に近隣市の視察もおこない一般質問や決算委員会で取り上げた経緯がある。現在の小島校長は当時教育委員会に所属し、野田市の状況を研究し、議会質問の答弁書を書いたとのこと。私たちの問題提起もあり、その後、情緒学級の設置がひろがったが、その原点としての流山小学校の特別支援教室を見ることができて感慨深いものがあった。

■南流山中学校（Ｒ４年５月１日時点の生徒数６００人、２２学級（うち特別支援学級４学級）、校舎築年数３２～３９年）について、Ｒ６年４月に旧東洋学園大学跡地への引っ越しを控え、必要なソフト・ハードでの対応の必要性を理解できた。

特に、中学生と小学生との身体的違い（身長や高さ）だけではなく、各施設や各備品について、危険性を把握（理解）し、行動する発達段階の違いを想定した改修・準備等の必要性を知ることができた。

また、Ｒ５年度末まで、中学生の義務教育や、受験に責任を持ちつつ、Ｒ６年４月には旧東洋学園大学への引っ越しと開校準備、南流山第２小学校（仮称）としての開校準備を一体的、同時進行で取り組む困難さを深めることができた。

中学校の移転及び南流山第２小学校（仮称）の開設は、児童生徒及び教職員には責任はないことから、必要な経費をしっかり確保することが非常に重要であると考える。

特に、想定が困難な千葉県の採用・配置・移動する教職員が一体感を維持しつつ、生徒の思い出作り、校歌をはじめとした南流山中学校の伝統の伝承、新しい学校環境での新規スタート（小中学校で異なる学校内の装飾や生徒の通学経路における安全確保等）を保障するための、財政的、人的等の支援・準備が特に重要と考える。

■南流山中学校移転用地（旧東洋学園大学キャンパス）について、大学キャンパスを活用した中学校運営にとどまらず、南流山中学校の利用敷地を１．５倍化した経緯（私立中学校利用断念に伴う公立中学校の利活用優先）が将来的に大きな教育効果を発揮できるよう財政的、人的（植栽の専門的管理責任者の配置、校舎外壁のタイル対応（剥離・落下防止及び維持管理のための業務委託）等、小中学校には通常、配置されていないものの、旧東洋学園大学キャンパスの学校環境を保全する上で、必要な支援が必要と考える。

移転先は、八木中学区であり、立地条件による生徒の通学手段は自転車通学も大きな割合を占めることになる。現在の見込みでは、自転車通学が５００台前後にもなることから、安全対策をしっかり取り組むことが求められる。党は既存道路使用による安全対策に加え、松戸市同様に坂川の土手整備を提案しており、引き続き開校までの間注視したい。